

創造における *Conversio*

—アウグスティヌスの『創世記逐語註解』に
おける靈的被造物の生成—

片 柳 栄 一

アウグスティヌスは、その長い著作活動の中で、五回にわたって、創世記始めの数章に関する註解を著している。まず A. D. 388 年に『マニ教徒を論駁しての創世記註解』*De Genesi contra Manichaeos* をあらわし、つづいて A. D. 393 年には未完の『創世記逐語註解』*De Genesi ad litteram, imperfectus liber* を書いている。A. D. 397 年より始められ、A. D. 400 年頃書きあげられた『告白』の十一～十三巻においても、創世記 1～3 章の註解を記しており、これにつづいて A. D. 401 年より始められ、A. D. 414 年にまでわたって書き続けられた『創世記逐語註解』*De Genesi ad litteram* は、もっぱら、創世記 1～3 章の註解を目的としたものである。さらに A. D. 414 年より始められた『神の国』*De Civitate Dei* の十一巻からは、創世記の註解にあてられている。こうした創世記註解の頂点とも言える *De Genesi ad litteram* において、創造における *conversio* という一見奇異な考えが述べられている。この考えはすでに『告白』の十三巻の始めにも出てくるが、⁽¹⁾ 逐語註解で一層深められ、詳細に論じられている。この小論では、一見不可解ながら、アウグスティヌスの宗教的経験と存在論的思索の深さを示すこの思想が如何なるものであるかをまずテキストに沿って見、つづいてこの考えの淵源としてのプロティノスにおける *ἐπιστροφή* について考察し、このプロティノスの思想との対比において、アウグスティ

ヌスのこの思想の意義を究明したいと思う。

I

アウグスティヌスが、創造における *conversio* を語るのは、創世記一章三節の「光あれ」という言葉の解釈に関連してである。つまりこの光の創造を、靈的被造物の創造と解釈してである。我々はそれ故まず、アウグスティヌスがこの光の創造についてどのような解釈をしているかをみてみなければならぬのであるが、この「光あれ」という言葉に先行し、関連する冒頭一節「始めに神は、天と地とを創造された」という言葉の解釈が *conversio* の問題に深く関わっている。そこでこの一節のアウグスティヌスの解釈をまずみることにする。

アウグスティヌスは、様々の解釈を述べた後、彼自身の解釈と思われるものを、疑問の形ではあるが記す。⁽²⁾「あるいは、天と地とは二つの無形相的質料を言ったのであろうか。即ち一つは、靈的な生であるが、創造者に身を向けず (*non conversa ad creatorem*) 自らのうちでありうる如きものとしての靈的生である。——というのも、そのように身を向けることによって、形成され、完成されるのである。しかし身を向けないなら、無形相的なのである。——もう一方は、物的であり、それが全ての物的な性質を除くことによって理解される場合である。⁽³⁾」

この解釈においては、物的なもののみならず、靈的なものにも無形相的質料が認められている。これより以前の『告白』十二巻においては、こうした解釈の可能性は述べられているが、彼自身の解釈としてあげられているのは、天とはいわゆる「天の天」つまり始めより形相づけられたものとしての靈的被造物をあらわし、地が無形相的質料をあらわすというものであった。⁽⁴⁾これに対してここでは、この句全体が、靈的、物的被造物両者の無形相的質料 *materia informis* を指すとされ、アウグスティヌス自身、⁽⁵⁾解釈を修正しているようである。

それに対して「光あれ」という言葉は、形相を獲得し、形成されることと解釈される。「『光あれ』と神が言われた。」という三節の言葉は、無形相的質料の創造に関わるものでないことが言われ、その理由が述べられる。「何故なら、最高で始源なるものに似ていないものが、或る種の無形相性によって無に傾くとき、この不完全なるものは、御父に永遠に結びついている御言葉の形相をまねびすることがないからである。御父に永遠不変に結びついている御言葉の形相をまねびするのは、この不完全なものが、真実で永遠的なるものに、つまり自らの存在の創造者に身を向ける行為 *conversio* を、その類に従ってなす時にである⁽⁶⁾」。つまり彼はこれまでの自らの解釈を修正して、「始めに神は……」の句は *materia informis* の創造について述べたものであるとし、「光あれ」の句が、靈的被造物の形成 *formatio* に関わるとするのである。彼はその根拠として「『光あれと神が言われた *Deus dixit*』という神の御言葉への言及をあげる。「『成れと神が言われた』と聖書が語っていることにおいて、我々は、御父に等しく永遠なる御言葉の本性における非物体的な神の語りかけを理解する。それは、不完全な被造物を自らのもとに呼びよせたもうのである。被造物が無形相的でなく、各々個々に形成されるためである。この個々のものは、秩序によって生じるのである。というもこの *conversio*, *formatio* において、被造物は、各々に応じて、御言葉なる神、即ち御父に永遠に結びついた神の御子をまねびするのである。……しかし創造者にそむき、無形相的で、不完全なままとどまるなら、この御言葉の形相をまねびすることはないのである⁽⁷⁾」。アウグスティヌスは、創造に二つの段階とも言うべきものを考えており、その各々を、「始めに神は……」という一節の句と、「光あれと神は言われた」という三節の句が示していると考えるのである。「つまり始源 *principium* によって、神より未だ不完全な存在を受けた被造物の始まりを暗示し、御言葉によって、神に呼び出された被造物の完成を暗示している。このようにして創造者によりすがり、御父に永遠不変に結びついている

る(御子の)形相を、その類に応じてまねびすることによって被造物は形成されるのである⁽⁸⁾」。このようにアウグスティヌスにとって、永遠なる御言葉のまねび *imitatio* が *conversio* であり *formatio* なのである。アウグスティヌスはこの御言葉のまねびを、御言葉の認識とも言っている。「というのも、理性的被造物は、まず自らの形成を認識して、次いで形成されたのではない。そうではなく、自らの形成そのものにおいて認識するのである。つまりそれに身を向ける *conversa* ことによって自らが形成されたその真理の照明によって認識するのである。これに対して他のより低い被造物は、まず靈的被造物の認識のうちに生起し、次いで自らの類において生起するのである⁽⁹⁾」。アウグスティヌスの創造の考えによれば、他の被造物は、まず靈的被造物の認識において生起し、その後⁽⁹⁾に事実的に生起する。しかし靈的被造物そのものにおいては、神の御言葉の認識そのものが *formatio* であり、これが *conversio* でもあり、それが創造であり生成である。神の御言葉を認識することによって、靈的被造物は、真に存在を形成するのであり、そのような存在構造をもっているのである。アウグスティヌスは、第一の光の創造の特性を、同じように第三巻においても、人間の創造との連関で述べている。「(光の創造の場合) 第一の被造物において、神の言葉の何らかの認識が生じ、この認識の後に、神の言葉のうちでつくられたものが、より低い仕方においても造られるというのではない。そうではなく光そのものが、まず造られたのであり、その光のうちで、それによって光が造られた神の御言葉の認識が生じたのである。そしてこの光にとって、この認識が、自らの無形相性から、形相を与えたもう神に身を向けること *converti*⁽¹⁰⁾ であり、創造されること *creari* であり、形成されること *fomari* である。……このことは人間の創造においても保持されている。というのも人間の本性も、叡知的なものであり、かの光の如きものなのであるから。それ故人間にとって生成するとは、それによって自らが生成する神の御言葉を認識すること⁽¹¹⁾なのである」。靈的被造物にとって生成することは、認識すること

あるというのは、存在と認識とが同一であるというのではないであろう。そうでなければ *materia informis* と *conversio* による *formatio* という存在の二重構造を語る必要はないであろうから。しかし、存在の形成が、他の被造物と異なり、認識によってなされるという特性を持っているということ(12)を意味しよう。つまり他の事物は、神によって外から形相 *forma* を与えられるだけであるが、靈的被造物は *forma* なる神の御言葉を認識することによって形成されるのである。認識が存在形成に本質的に属している。決して形成されたことを認識するというのではなく、神の御言葉の認識が形成なのである。そうした存在の在り方が、彼によれば、物的存在と区別された靈的被造物の特性であり、人間もそうした存在なのである。そしてアウグスティヌスは、こうした靈的被造物の存在の優位的在り方が、創世記の言葉づかいにも表われていると解する。他の被造物の創造においては、まず神が成れ *fiat* と言われ（これは神の御言葉の永遠の語りである）そのようになった *sic est factum*（これは靈的被造物の認識における生起である）と言われ、ついで神は造りたもうた *Deus fecit* と語られているが、靈的被造物としての光の創造と、人間の創造においては、第二の *sic est factum* という表現が欠如しているのは、まさにこうした存在における生成と認識の同時性を示すものである(13)という。

ところでアウグスティヌスは『告白』ではまだ明瞭に認めてはいなかった靈的被造物の無形相的質料を、『逐語註解』においてははっきり認めているのであるが、そうした *materia* を認めねばならない理由を次のように述べている。「しかし被造物はたとえ、神の御言葉により近いように思える靈的、叡知的、理性的被造物であっても、無形相的な生を持ちうるのである。というのも、こうした被造物にとって存在することと、生きることとが同じであるようには、生きることと叡知的に至福に生きることが、同じではないからである。何故なら不変の知恵から離反し、愚かに悲惨に生きるなら、それが無形相性なのであるから。しかし不変の知恵の光、つま

り神の御言葉に身を向ける *conversa* なら、形成されるのである。というのもこの神によって被造物は存在をえて、如何なるものであれ、存在し、生きるものであり、この神に身を向けることにより、叡知的、至福に生きるからである⁽¹⁴⁾。先に人間を含む靈的被造物にとって、真に存在すると言えるのは、神の御言葉にまねび、認識することによってであると言われたが、それは神に身を向け、神によりすがるときにであり、自分のうちにとどまっているだけでは、真の自己、至福なる生とは言えないのであり、無形相的なのである。ここには被造的存在の徹底した神への依存性が暗示されていると言えよう。*materia informis* は、被造物がそれ自身では自存しえず、神に向い、神によりすがるときにのみ、自己たりうることを暗示していると言えよう。

ところでアウグスティヌスによれば、*materia informis* と形成された事物が区別されるということは、質料が時間的に先行するということではない。「無形相的質料は、形成された事物に対して、時間的に先行するのではない。兩者つまり、被造物がそこから造られたものと、被造物がそれであるものとは同時に創られたのであるから。……あるものがそこから生じるものは、時間的にでなく、或る種の淵源 *origo* において、そこからなつたものに先行するのである⁽¹⁵⁾」。これまで語られた *materia informis—conversio—formatio* の順序は、時間的なものではなく被造的存在の源に、あるいはその根本的な存在構造に関わるものであって、神の創造においては、時間の原初において一瞬にして同時に創られたのであるという。『告白』においては、天の天たる靈的被造物と、無形相的質料とは、時間的転変 *vicissitudo temporum* を越えるものであった。『逐語註解』においては、創世記一章で語られているのは、時間の具体的展開に関わるのではなく、言わば時間の根 *radices temporum*⁽¹⁶⁾、時間の原初に関わるものであると解されている。アウグスティヌスは、これらの註解において、我々被造的存在の形而上学的な根本構造を探究しているのである。

これまでアウグスティヌスの *conversio* の考えをみてきたのであるが、我々にとって奇異と思えるのは、すでに存在する事物の自発的行為と思える *conversio* という概念が、無からの創造と言われる場面で用いられていることである。しかもこれは時間的移行ではないと言われる。一体アウグスティヌスは、どのような意味をこの *conversio* に与えているのであろうか。我々はこのような問をもって、アウグスティヌスのこの思想の淵源と思えるプロティノスの *ἐπιστροφή* の考えにさかのぼってみよう。そしてあらためてアウグスティヌスのこの思想の意義を探ってみたい。

II

プロティノスにおいて *ἐπιστροφή* という言葉は、一者につづく *νοῦς* と *ψυχή* にのみ用いられる⁽¹⁷⁾。我々の関連で言えば、*νοῦς* の一者からの生成において語られている。最もよく知られたテキストは、「第一のものにつづく秩序について」と題された V, 2, 1 で、*νοῦς* 以下のものの生成が扱われる箇所である⁽¹⁸⁾。「というのも一者は何ものも求めず、何ものも所有せず、必要としないことによって、完全なものであり、いわばあふれでて、その過剰さが他のもの (*ἄλλο*) を創ったのである。ところで生じたものは、一者の方に身を向け (*εἰς αὐτὸ ἐπεστράφη*) 満たされ、一者を視るものとなり、理性 *νοῦς* となった。そしてかの一者に向かってとどまることが存在 *ὄν* を創りだし、一者への視が理性を創ったのである⁽¹⁹⁾」。ここには、一者の完全性と、それによりあふれでて、他なるもの (*ἄλλο*) が創られ、この他なるものが真に *νοῦς* として、存在として生成するために、一者へ身を向ける *ἐπιστροφή* が必要であることが、簡潔に記されている。しかしここでは、一者から他なるものが創られたとされながら、この他なるものの特性については触れていない。この他なるものについて詳述しているのは、二つの質料 *ύλη* を扱った II, 4, 5 の箇所である。ここではアリストテレスが数学的対象に認めた叡知的質料 *ή ύλη νοητή* という概念が⁽²⁰⁾、永遠なる叡知的世界

にまで拡大されている。「この叡知的質料が生れたと言われるのは、元初 *ἀρχή* をもつからであり、生れたのでないと言われるのは、時間的に元初をもつのでないからである。そうではなく常に他のものに依拠している。この宇宙のように絶えず生成している如きものではなく、かの叡知的宇宙のように恒常するのである。というもかの叡知的世界に常にある異他性 *ἑτερότης* が質料を創るのである。というも質料の元初は、この異他性であり、これが最初の動きなのである。それ故この異他性に関して、動性と異他性とは同時に生れたと言われているのである。ところで最初のものから発したこの動性、異他性は、不定 *ἀόριστος* である。規定される *ὀρισθῆναι* ためには、かの一者を必要とする。規定されるのは、一者に身を向ける *πρὸς αὐτὸ ἐπιστροφή* 時にである。それ以前は、質料、他なるものは、不定であり、決して善きものではなく、善に照らされていないのである⁽²¹⁾。ここでは一者から生れたものが、まずは質料として不定 *ἀόριστος* なものであり、これが規定されるために *ἐπιστροφή* を必要とするとされるが、ここにはアウグスティヌスの *conversio* に対応する概念がほとんど出ている。*materia informis* にあたるのは *ἕλη ἀόριστη* であり、*conversio* は *ἐπιστροφή* であり、*formatio* は *ὀρισθῆναι* であり、*illuminatio* は *φωτίζεσθαι* である。

こうした思想の核心は、叡知的世界にまでもたらされた *ἕλη* と *ἐπιστροφή* による形成 *ὀρισθῆναι* という二重構造にあると思われるが、一体この二重構造の意味はどこにあるのであろうか。この間を解く鍵は、プロティノスの *ἕλη* 概念のうちにあるように思われる⁽²²⁾。この概念は、もちろんアリストテレスに由来するものであり、生成するものの変化を説明するために *μορφή* を受け入れる *ὑποκείμενον* を想定することに基づくものである⁽²³⁾。あるいはプラトンの『ティマイオス』の *χώρα*, *ὑποδοχή* にまでさかのぼることもできよう⁽²⁴⁾。しかしプロティノスの *ἕλη* 概念の特徴は、*ἕλη* の異他性格を強調する点にあるように思われる⁽²⁵⁾。先の箇所も、プラトンの『ソフィ

ステス』に依拠して⁽²⁶⁾ *ύλη*の *ἀρχή*が、*έτερότης*にあるとしたのであるが、この点をもう少し詳しくみてみたい。

プロティノスはⅡ, 4, 13で感覺的 *ύλη*を論じながら、*ύλη*が性質的なものを持たないと述べた後、その異他的性格を次のように記す。「さて質料の特性は、それがあるところのもの以外ではない。そしてこの特性は、付加されるものではなく、むしろ他のものに対する関係 *σχέσις*, つまりそうしたものと異なるということを示す関係のうちにある。ところでほかのものは、単に異なるというだけでなく、形相の如く、各々何ものかとしてある。しかしこの質料は適切にも、唯単に「他」 *άλλο* とのみ言われよう。あるいは恐らく複数で、他々 *άλλα* と言われるべきかもしれない。単数で他 *άλλο* と言うことによって、一義的に規定することなく、複数で *άλλα* ⁽²⁷⁾ と言うことによってその不定性 *τò άόριστον* を示すためである」。プロティノスによれば、質料は、まさに「他」 *άλλο* として、関わる事物との相異、関わる事物に対する否定、欠如を示すだけなのである。こうしてプロティノスは、徹底して質料の欠如的性格を強調することになる。これはアリストテレスに対する異論を含んでいる。アリストテレスは、「自然学」第一卷九章で、*ύλη* と *στέρησις* とが、異なると主張する。「というのも我々は、質料と欠如態とが異なると言う。それらのうちの一方、つまり質料は、付帯的には、あらぬものである *οὐκ ὄν εἶναι* と言うのに対して、欠如態は、それ自体で *καθ'αυτήν* あらぬものであるとする。そして一方は、つまり質料は、ある意味ではほとんど実体 *οὐσία* であるとするが、他方の欠如態は、どのような意味でも決して実体ではない」⁽²⁸⁾。プレイエによれば⁽²⁹⁾ アリストテレス派のある人々は、この考えを解釈して、この二つは基体 *ύποκειμένον* においては一つであるが、説明方式 *λόγος* においては二つであると主張していたという。これに対してプロティノスは論駁する。「さてこのように基体においては一つであるが、*λόγος* においては二つなのであろうか、……*λόγος* が二つとは、その一方つまり質料の *λόγος* は基体に

関わり、欠如態のそれは、他のものに対する関係 *σχέσις* を明らかにするということになる。しかし質料の *λόγος* も他のものに対しており、つまり基体の *λόγος* は、他のもの（つまりそれにとって基体であるもの）に対しており、欠如態の *λόγος* は、そのものの不定性を明らかにしているとすれば、恐らく欠如態の *λόγος* も、*ύλη* に関わっていよう。……ところで欠如態が、その不定性、無限性、性質の欠如性によって質料と同じであるとすれば、⁽³⁰⁾ どうしてなお *λόγος* が二つあろうか」。アリストテレスは、*ύλη* という言葉で、⁽³¹⁾ 各々の事物に最も近い固有の素材のようなものを考えている。鋸の質料は鉄であって、木材や羊毛ではない。そうしたものは、鋸の質料にはなりえない。質料そのものが、そのうちに独自の可能性をもっている。彼が第一質料にさかのぼるとしても、その限りにおいてであると言ってよいであろう。その故に単なる否定性としての欠如態と *ύλη* とは異なるのである。ところがプロティノスにおいては、この区別が撤廃されてしまう。まさに他と異なるという欠如的性格が *ύλη* の本性とされるのである。それ自体においては、何ら積極的なものを持たず、唯他のものとは異なるという否定的関係性を示すだけのものである。しかもこれが単なる説明の方式ではなく、この否定的関係性そのものが基体化されている。プロティノスはこの *ύλη* を悪の第一原因と考える故に⁽³²⁾ グノーシス的二元論との区別がむづかしくなる。⁽³³⁾ しかしプロティノスの *ύλη* は、それ独自の積極的な規定をもたず、否定する他のものに、積極的に対立するものを持たず、唯単に否定的関係性を示すにすぎないという意味では、二元論とははっきり一線を画していると言えよう。

プロティノスが叡知的質料というようなものを考えざるをえないのも、この質料の異他的性格の故であるように思える。一者以外のものが、一者から区別されるとすれば、そこには、他なるものとしての *ύλη* がなければならないのである。このように *ύλη* の本性は、一者とは異なるものとして、他なるものとして一者の外に向う動きであると言える。まさに *ύλη* が

あるが故に、一者とは別なものが存しえるのであるが、*ύλη* そのものは、それ自体においては不定 *ἀόριστος* なものであり、それ自体では自存しない。一者でないものが、一者でないものとして生成しうするためには、もう一つの動きが必要である。それが一者に向う動きであり、*ύλη* とは反対の動きであり、自らの不定性にとどまらず、存在するために一者を必要とし、一者に依存することを自覚した動きとしての *έπιστροφή* である。

こうしてプロティノスにとって *ύλη* と *έπιστροφή* の二重構造とは、一者以外の、一者から区別された存在を認め、しかもそうした存在が、己れ自身で自存できず、一者に身を向けることによって、真に存在するといえるような依存的存在であることを示そうとする論理であると言えよう。プロティノスの思想は、汎神論ではない。それは一者以外のものが、決定的に一者とは異なることを主張するからである。その区別の論理が、*ύλη* の存在の必然性を主張するのである。しかしまた二元論、あるいは多元論でもない。何故なら全ては一者に依存するからであり、そうした依存性の自覚を表明しているのが *έπιστροφή* である。

しかも重要なことは *έπιστροφή* は、機械的な動きではなく、根本的に自発的なことである。差異性と依存性をもちながら、その関係が根本的に自発的に担われているような関係の存在性を、この言葉は示している。それ故にこそ単に一者の一方的行為としてでなく、もう一方の *έπιστροφή* ⁽³⁴⁾ によって生成が完遂されると言われるのである。『プロティノスの発出論』を書いたトルイヤールも言うように、プロティノスの発出の考えは、一方で自然的、機械的な発出とは異なり、また他方、工匠や芸術家が作品を創るといったことをモデルにした創造の考えをも超えようとの動機より発するものである。それ故一者からの発出は、水が源より発して、ひたすら低い方に流れるといったものではなく、また何らかの素材を用いて作品を創造するというのでもない。この発出は、*ύλη* の外へ向う動きと、*έπιστροφή* の内へ、一者へ向う二重の動きからなるものであり、根本的に自発的なもの

である。このように根本に自発性を据えて、一者よりの、他のものの生成を考えようとするのが、プロティノスの発出の考えであり、その核心にあるのが、*ἐπιστροφή* なのである。

III

アウグスティヌスは、*conversio* に対応する *materia informis* という言葉を、初期の「秩序論」ですでに用いている⁽³⁵⁾。こうした問題が発点からすでに彼の関心の圏内にあったことが知られよう。しかしそこでは、唯、哲学の基本概念であることが述べられているだけであり、創造論の中で展開されるのは、*De Genesi contra Manichaeos* においてである。「それ故最初に、混然とし、無形相な質料が創られ、そこから区別された、形相をもった全てのものが成ることになったのである。これをギリシア人は、混沌 *chaos* と呼んだのだと私は思う。他の（聖書の）箇所では、神を賞賛して、『あなたは世界を、無形相的質料から創りたもうた』（知恵の書Ⅱ. 18）と言われているのを、私たちは読む⁽³⁶⁾。この質料が如何なるものであるかが詳述されるのは、『真の宗教について』においてである。しかしそれは、プロティノスにおける如く、徹底的な否定的関係性、欠如態ではなく、そのうちに形相への可能性をもったものである。「それ故、或る種の無形相的質料から、世界が創られたとしても、この質料自身は、無から創られたのである。実際、未だ創られていないものも、或る仕方では、形成されよう、開始された (*inchoatum*) ののである。神の恵みによって形成可能 (*formabile*) なのである。形成されることは善いことである。それ故、形相受容能力 (*capacitas formae*) も善を少しは持っている。それ故、全ての善きものの創り主は、形相を与えたもう方であるが、この方自身が、形成される可能性 *posse formari* をも創りたもうたのである⁽³⁷⁾。ここでのアウグスティヌスの関心は、全て創られたものが、善きものであることを示すことにあり、しかも形相をもつことが善きことであるとの基本理解があ

る故に、*materia informis* の善性が問題になっているのであるが、形相への可能性を質料が持っている故に善きものであると考えるのである。この質料観は、プロティノスの欠如態と観る観方よりも、質料と欠如態を区別するアリストテレスの考えに近いと言えよう。質料に関するアウグスティヌスの考えは、プロティノスからよりも、アリストテレスの考えに近いポルフィリオスの影響が強いとする説は当っていよう⁽³⁸⁾。ところでアウグスティヌスが、質料の存在を考えねばならないのは、事物の可変性の故である。「可変的事物の可変性そのものは、全ての形相を受け取ることができる。そして可変的事物は変じて、そうした形相になってゆく。それではこの可変性とは何であろうか。魂であろうか、物体であろうか、魂、あるいは物体の形相であろうか。何か無なるもの *nihil aliquid*、あって無いものとか言うことが許されるなら、そう言ったものであろう⁽³⁹⁾」。この考えはプロティノスが質料を考える際の出発点にしたアリストテレスの考えに近いものであるが⁽⁴⁰⁾、プロティノスが、この考えを一層ラディカルにおし進めて、否定的関係性そのものとして *ὄλη* を把えたのに対し、アウグスティヌスは可変性の根拠という従来の考えをそのまま踏襲している。しかし可変性が被造物の根本的特徴である限り、質料はアウグスティヌスにとっても、被造物の否定性、無性を示し、創造者から分つものであると言えよう。

質料は質料だけでは自存しえない。形相を受け入れてのみ事物として成立し、善きものと言いうる。この形相を求める動きが *conversio* である。初期の著作においては、この動きは物体が真の幾何学的形象に至ろうと努める動きであり、真理の模倣 *imitatio veritatis* であるとされる。「次のことをわきまえないほどの精神の盲いであろうか。つまり幾何学において教えられる事柄は、真理そのもののうちに住むか、或いは真理がそのうちに住むかであるが、かの物体的形象は、あたかもこの幾何学的形象に至ろうと努めている *tendere* 如くみえるのであるから、何かしらの真理の模倣を所持しているのである⁽⁴¹⁾」。この真理の模倣という考えは、『真の宗教につ

いて』で一層発展させられる。「虚偽とは、存在しないものを存在すると考えることであるだけでは少なくとも、明瞭に見てとる人は、真理が存在するものを明示するものであることを理解する。しかし物体は、それが模倣していると確証されるかの一なるものを実現しない限りにおいて、偽っているものであり、この一なる元初 principium によって、存在するものは何であれ、一であり、この一なるものへの類似 similitudo を志向するものは何であれ、当然我々は肯定する。というのも統一から逃れ出ようとするもの、そして不類似へと努めようとするものは何であれ、我々は当然肯定しないからである。もしそうであるなら、何らかの仕方で一なるものが、それによって一であるところのかの元初たる唯一無比の一なるものに、まったく類似し、完全にこの一を実現し、この一そのものである或るものが存在することを、人は理解しえよう。そしてこれが真理であり、元初における言葉であり、神のもとなる言葉なる神である。虚偽が、一なるものをまねびする事物から生じるとしても、それをまねびする限りにおいてでなく、実現できない限りにおいてであり、かの真理はこの一なるものを実現することができ、一なるものがあるところのものでありえ、かの一なるものを、それをあるがままに明示するものなのである。それ故に一なるものの言葉、その光と正しくも言われるのである⁽⁴²⁾」。全ての事物は、究極の一者を模倣し、それに似る限りにおいて存在する。ところでこの一者を完全に実現し、たがうことなく類似しているものがあり、これが真理であり、神の御言葉である⁽⁴³⁾。他の事物は、この真理、御言葉が、究極の一者にたがうことなく類似している様を自らまねびし、御言葉の類似にならおうとつとめるのである。アウグスティヌスが、真理の模倣というのは、真理がそのように一者に類似してあるその類似を、同じように実現しようと努めることであり、その類似にならい、実現する度合に従って存在の度合もあるのである。そのようにして、全ての事物がそれなりの仕方、真理を模倣しようと努め、その限りで各々の仕方存在しているのである。De Ge-

nesi ad litteram においても、全ての事物がこの *imitatio* をしていると解釈しえよう。「靈的なものであれ、物的なものであれ、無形相的質料…の不完全さは……その類に⁽⁴⁴⁾応じた *conversio* によって形相を得る時に、御言葉の形相をまねびする」と述べられ、またしばしば「その類に⁽⁴⁵⁾応じてまねびし *pro suo genere imitando*」と言われることから、全ての事物が何らかの仕方⁽⁴⁶⁾で *imitatio* し、*conversio* するというこれまでの思想を残しているように思えるが、*conversio* の重点は、明らかに靈的⁽⁴⁶⁾被造物に置かれている。実際一卷以降の他の事物の創造には、この言葉はもはや用いられていないのである。靈的⁽⁴⁶⁾被造物の生成の根本的特徴は、先にも述べた如く、御言葉に身を向け、御言葉を認識することが、創造されることであり、形成されることであり、認識と生成とが一つであるということである。事物は、真理を模倣する限りにおいて、その度合に応じて存在するというのは、彼が初期の著作以来主張してきた思想であるが、そのような存在の在り方を、端的に示しているのは、まさに靈的⁽⁴⁶⁾被造物なのである。

アウグスティヌスの思想の展開を、新プラトン主義的な上昇論 *anagogie* から、創造論への移行の過程として把えようとしているのは、オリヴィエ・ドゥ・ロワ⁽⁴⁷⁾であるが、創造における *conversio* という思想は、この二つの潮流がぶつかり合い、渦まいている様を思わせる。アウグスティヌスにおいては、次第に創造の思想が優位を占めてゆくのであるが、*De Genesi ad litteram* において、靈的⁽⁴⁶⁾被造物の創造に *conversio* という明らかに認識の上昇を示す言葉が残されていることには深い意味があるように思われる。それはつまり、靈的⁽⁴⁶⁾被造物の存在が、その存在の根本的要素として認識を内に宿しており、その存在に認識が不可欠のものとして属する存在として靈的⁽⁴⁶⁾被造物を把えているということである。靈的⁽⁴⁶⁾被造物が形相を得るのは、単に外から形相を刻印づけられるからではなく、形相を認識することによってなのである。靈的⁽⁴⁶⁾被造物が獲得すべき形相とは、まさにそのように認識によって得られる如きものなのである。

そしてこの靈的被造物の認識は、*imitatio verbi* 御言葉のまねび、しかも永遠不変に父に結びついている *inhaerens* 形相なる御言葉のまねびである⁽⁴⁸⁾と言われる。御言葉がまったく御父に等しく、依存的に結びついているその関わりを被造物はまねびし、神に依存し、結びついてゆくのである。御言葉の認識、まねびとは、そうした神への絶対依存性の自覚であり、そうした依存性を、意志において自発的に肯定することである。靈的被造物とは、被造物の創造者への関わり、その絶対依存性を認識し、自覚し、自発的に肯定しうる存在なのである。そのことが存在の生成そのものに *conversio* が属するということの深い意味であろう。

先にもみたように、プロティノスにおける *ἐπιστροφή* は、彼の存在論の核心をなし、工匠が、事物を製作することをモデルとしたような創造の考えを、超克しようとする意図をもったものであるが、アウグスティヌスは、この異質な思想を、自らの創造論の中へ組み入れる。もちろんその異質性が解消され、十分均整のとれた形で、彫琢がなされたはずもなく、座りごこちよくおさまってもいない。しかしアウグスティヌスがなおあえてこの *conversio* の考えを組み入れようとした意図は、およそ明らかであろう。それは結局、靈的被造物の存在の特異性を明らかにしようという意図である。この存在には、その本質的要素として、認識が属し、さらには自発性、自由が属するという特異性である。

創造という考えの根本にあるのは、被造物の創造者に対する関係の、絶対依存的性格である。この依存関係は絶対的であり、しかも外的である。被造物がどうあれ、すでに絶対依存的に措定されているのである。物体の場合には、そうした外的依存関係にとどまっている。*materia* は、外から *forma* を与えられ形成されるのである。しかし靈的被造物の場合は、*conversio* によって、御子の御父に対する依存関係を認識し、まねびすることによって、自らの形相を獲得し、生成するという。ここでは依存関係は内面化、自覚化されていると言えよう。全ての事柄が、神の叡知的光、御言

葉によって、形相を与えられ、存在を得ている。それがまさに創造である。しかし靈的被造物は、全てのものが依存する光に身を向け、この光を認識し、それへの依存性を自覚しうるのであり、そのような自覚において始めて真に存在していると言えるのである。そのような存在として創られているのである。

しかし靈的被造物が認識において依存性をまねびし、依存性を自覚し、自発的に承認すべきであるということは、また離反の可能性も存することを意味している。このように靈的被造物が *conversio* によって形成されるということは、離反の可能性を宿したものであるということであり、創造における *conversio* とは、被造的存在の根底に存する自由、被造的自由を根拠づけるものである。

我々は創造における *conversio* という考えを、最も良く表現したアウグスティヌスの言葉を知っている。それは『告白』の始めの「あなたは、私たちをあなたに向けて *ad te* 創られました。それ故私たちは、あなたのうちにいこうまでは、安きをえないのです。」⁽⁵⁰⁾ という言葉である。まさしく「あなたに向けて創られた」ということが創造における *conversio* ということの最も深い宗教的意味であろう。あなたに向けて創られてある故に、その離反の悲惨さと深刻さも一層増すのである。プロティノスにあっては *ἐπιστροφή* は、外的依存関係を示すに過ぎないような創造の考えを越えるものとして考えられていたが、アウグスティヌスは、これをもう一度創造論のうちに組み入れ、絶対的依存性を、自覚的に、自由に受け入れる被造的存在の神に対する自由なる関係性を基礎づけるものとして、宗教的に深めたと言えよう。

さらにプロティノスに比したアウグスティヌスの特徴としてあげねばならないのは、彼の場合、神の呼びかけが、決定的に *conversio* に先行していることである。「自らのもとに呼び寄せ」⁽⁵¹⁾ 「呼びかけのひそやかなる靈感によりて語りたもう」⁽⁵²⁾ と *conversio* に先き立つ呼びかけを明言してい

る。このような神の呼びかけの先行性と、それに応える *conversio* を形而上学的な深さにおいて表現している『三一神論』XIV, 15, 21を引用して、小論の結びにかえたい。「しかし人は、自らの主なる神を想い起す。…それは人が神を、アダムにおいて知っていたからではない。あるいはこの身体的生以前に、どこか他のところで知っていたからでもなく、最初に創られこの身体に入れられた時に、知っていたのでもない。というのもこれらのいずれも思い出さないからである。これらはいずれも忘却によって拭き去られている。しかし人は、想い起し、主に身を向けかえす (*ut convertatur ad Dominum*)。それはあたかも、たとえ神から離反している時にも、何らかの仕方で触れられている光に、身を向ける如くにである」⁽⁵³⁾。

註

- (1) *Confessiones* XII, 2, 3.
- (2) 様々な解釈の可能性の一つとして疑問の形で出しているように見えるが、それがこの時点での彼の解釈であることは、この考えに沿って論述が進められることから明らかであろう。
- (3) *De Genesi ad litteram* I, I, 2.
- (4) 『告白』十二巻の「天の天」としての靈的被造物は、始めより形相づけられていると多くの学者は解するが(例えば J. Guitton, *Le temps et l'éternité chez Plotin et Augustin*, Paris 1933, P.139 E. Gilson, *Introd. à l'étude de S. Augustin*, Paris 1943, P. 257), J. Pépin は、アウグスティヌスの真の考えは十三巻に述べられた *conversio* を存在論的に含んだ二重構造 (*materia informis - formatio*) をもつものであるとする。J. Pépin, "Ex platoniorum persona" *Études sur les lectures philosophiques de Saint Augustin*, Amsterdam 1977, p. 198~202. これに対し Bibliothèque Augustinienne のアウグスティヌス全集の48~49巻 *De Genesi ad litteram* の註解者(P. Agaësse と A. Solignac の共同註)は『告白』十二巻十三巻には、アウグスティヌス自身の考えの揺れがあり、十三巻に至って、後に「逐語註解」に結実する考えの方向が定められると解し、Pépin は、

この修正を考慮していないと批判する。Bibliothèque Augustinienne, Oeuvres de Saint Augustin, 48, *La Genèse Au Sens Littéral*, Paris 1972, p. 587.

- (5) 前記の註釈者 (P. Agaësse, A. Solignac) の考えが妥当であると思える。
- (6) *De Gen. ad litt.*, I, IV, 9.
- (7) *De Gen. ad litt.*, I, IV, 9.
- (8) *De Gen. ad litt.*, I, IV, 9.
- (9) *De Gen. ad litt.*, II, VII, 16.
- (10) 能動的意味に用いられていると解する。
Félix Gaffiot, *Dictionnaire illustré latin - français*, p. 426.
- (11) *De Gen. ad litt.*, III, XX, 31.
- (12) この点が *materia informis - formatio* という二重性の問題の核心でありこのことの持つ哲学的意味は現代にまで続いていよう。
- (13) この言葉づかいに関してはすでに *De Genesi ad litteram, liber imperfectus* においても注意されている (8, 30)。*De Genesi ad litteram* においては一層はっきりこの相異が強調される。*De Gen. ad litt.* II, VI, 15, III, XX, 31. cf. A. Solignac, *Exégèse et Métaphysique, Genèse I, 1~3 chez saint Augustin*, in : *In Principio, Interprétation des premiers versets de la Genèse*, Paris 1973, p. 153~171.
- (14) *De Genesi ad litt.*, I, V, 10. cf. Conf. XIII, 2, 3.
- (15) *De Genesi ad litt.*, I, XV, 29.
- (16) *De Genesi ad litt.*, V, IX, 11.
- (17) 一者が *ἐπιστροφή* をもつかどうかはこれを語っているようにみえる二つのテキスト, V, 1, 6, 18 と V, 1, 7, 5 を *πρὸς αὐτό* と読むか *πρὸς αὐτό* と読むかにかかっている。再帰代名詞と読むのは思想的に面白く感じるが、この二箇所になかなく、V, 3, 1, 4 では一者に *ἐπιστροφή* が否定されていることからみても、*πρὸς αὐτό* と読むべきであろう。最近の Henry - Schwyzer 版は *πρὸς αὐτό* となっている。参考までに *πρὸς αὐτό* と読む人としては、J. Trouillard, *La Procession plotinienne*, Paris 1955, p. 71. J. M. Rist, *Plotinus, The Road to Reality*, Cambridge 1967, p. 267. また E. Bréhier の仏訳 Harder の独訳もこれをと

る。これに対し, *πρὸς αὐτό* と読む人としては P, Aubin, *Le Problem de la "Conversion,"* Paris 1962, p.161, T. A. Szlezák, *Platon und Aristoteles in der Nuslehre Plotins,* Basel 1979, S. 70, H. Buchner, *Plotins Möglichkeitslehre,* München 1970, S. 44.

- (18) もっと初期の段階で *νοῦς* の生成を扱っているテキストは *Enn.*, V, 4, 2, 1~8 cf. T. A. Szlezák, *ibid.* S. 54~65.
- (19) Plotinus, *Enn.*, V, 2, 1, 7~12.
- (20) Aristoteles, *Metaphysica* Z, 1036a9.
- (21) Plotinus, *Enn.*, II, 4, 5, 25~35.
- (22) プロティノスの質料概念については, J. M. Rist, Plotinus on Matter and Evil, *Phronesis* 6 (1961), p. 154~166参照.
- (23) Aristoteles, *Met.* Z, 1032 a12~27.
- (24) Platon, *Timaios*, 50B, 52A.
- (25) cf. J. Trouillard, *ibid.* P. 19. J. M. Rist, *Plotinus on Matter and Evil*, P. 154~156.
- (26) Platon, *Sophistes*, 254~259.
- (27) Plotinus, *Enn.*, II, 4, 13, 26~32.
- (28) Aristoteles, *Physica*, 192 a3~6.
- (29) E. Bréhier, Plotin, *Ennéades* II, Paris 1956 p. 52~53.
- (30) Plotinus, *Enn.*, II, 4, 14, 17~30.
- (31) Aristoteles, *Met.*, 1044 a15~32.
cf. David Ross, *Aristotle*, London 1923, p. 167~173, W. K. Guthrie, *A History of Greek Philosophy*, VI, Cambridge 1981, p. 203~222.
- (32) Plotinus, *Enn.*, I, 8, 7.
- (33) cf. Christoph Elsas, *Neuplatonische und gnostische Weltablehnung in der Schule Plotins*, Berlin 1975.
- (34) J. Trouillard, *ibid.*, p. 87.
- (35) Augustinus, *De ordine* II, 16, 44.
- (36) Augustinus, *De Gen. c. Man.*, I, 5, 9.

- (37) Augustinus, *De vera religione*, 18, 36.
- (38) O. du Roy, *L'intelligence de la foi en la trinité selon saint Augustin*, Paris 1966, p. 327.
- (39) Augustinus, *Conf.*, XII, 6, 6.
- (40) Plotinus, *Enn.*, II, 4, 1, Aristoteles, *Met.*, 1032 a 12~27.
- (41) Augustinus, *Soliloquia*, II, 18, 32, cf. *ibid.*, II, 20, 35.
- (42) Augustinus, *De vera religione*, 36, 66.
- (43) こうした真理観は晩年までひきつがれる。cf. *De trinitate* XV, 14, 23.
- (44) Augustinus, *De Gen. ad litt.*, I, IV, 9.
- (45) Augustinus, *De Gen. ad litt.*, I, IV, 9.
- (46) conversio を単に靈的被造物にのみあてるのは、アウグスティヌスの思想的発展の背景を無視していることになろう。
cf. Bibliothèque Augustinienne のアウグスティヌス全集 vol. 14, A. Solignac の註 p. 613~617.
- (47) Olivier du Roy, *ibid.* p. 173~408.
- (48) Augustinus, *De Gen. ad litt.*, I, 4, 9.
- (49) Augustinus, *Conf.*, XII, 10, 11参照.
- (50) Augustinus, *Conf.*, I, I, 1.
- (51) Augustinus, *De Gen. ad litt.*, I, IV, 9.
- (52) Augustinus, *De Gen. ad litt.*, I, V, 10.
- (53) Augustinus, *De Trinitate*, XV, 15, 21.